

係を検討する視座を提供している。本書が、ビルマの現在を理解し将来を展望するうえで読まれるべき書であることは間違いない。

引用文献

- The Editors. 2008. Current Data on the Indonesian Military Elite, September 2005-March 2008, *Indonesia* 85 (April): 79-121.
 玉田芳史. 2003. 『民主化の虚像と実像—タイ現代政治変動のメカニズム』京都大学学術出版会.

在来家畜研究会編. 『アジアの在来家畜—家畜の起源と系統史』名古屋大学出版会, 2009年, 461 p.

片山一道*

「鶏口となるも牛後となる勿れ」という成語がある。いわば評者の座右の銘なのである。今もなお脇差しのように忍ばせておき、なにが研究活動で大切なのか、などと尋ねられれば、おもむろに抜き出すことにしている。

大上段にかまえるがごとき研究テーマに大勢の人間が群がりへしあうような華々しき流行分野に身を置くよりも、つつましくともよい独特のスタイルを身につけ、誰もかれもがやらない問題にこだわり続けることのほうが、よほど痛快だし、なにかを発見するという研究活動の醍醐味にひたる機会も多いのではあるまいか。つまるところ、それこそが学問という人間の営為の真髄なのではないだろうか、とさえ念じている。この金言にピッ

リの感がする本書に出会うことができ、とても爽快な読後感にひたることができた。

本書は第Ⅰ部と第Ⅱ部の2部構成となっており、第Ⅰ部では家畜化のプロセスにまつわる原論的な内容であり、おおむね非常に啓発的である。そして第Ⅱ部の各論は各家畜が主人公であり、それぞれに楽しい挿話が盛りだくさん。かなりの人数の家畜学、あるいは畜産学関係の書き手たちが手がける。それぞれが得手とする動物種の家畜化の歴史、そして地域群の系譜関係をテーマにした質量感のあふれる良質の綜説を集成している。それらを野沢謙氏を中心となり感心するほどに周到に編集されている。

おそらくは本書は出版されるまでに、相当な歳月をかけて準備され、あれこれと周到な工夫が施されたのではあるまいか。野沢氏をはじめとする本書の執筆者たちのライフワークのごとき研究活動のエートスが香り高いモルトのように熟成された良書である。なにげなく示される研究データの質も、実は第一級のもののなのだろう。それにストイックに展開される論考も好感をもてる。ペラペラと読み急ぐことを凜として拒むような、なにかが感じられる。しっかりと背筋を伸ばして読むような本なのである。

もちろん、その道の専門家たちが、みずからが専門とする分野の専門知識を披瀝する大冊の専門書にはちがいないから、たしかに一見すると、お堅く難渋な学術書のように見える。ことに第Ⅱ部の各論はそうだ。集団遺伝学の方法論を駆使した分析データを展開する系統論関係のロジックを門外者がフォローし

* 京都大学名誉教授

ていくのは、いささか骨が折れるだろう。もし門外漢の方なら、そうした部分を軽く素通りするのも一考である。そこを素通りしても、なおかつ多くの珠や玉が残る。ただの専門書ではない。ただならぬ出版物である所以である。

どの登場家畜についても、それぞれの家畜化の歴史、つまりは人間とのかかわりの歴史が真摯に解説され論考されるだけでなく、たつぷりと興味深い文化史的な背景が紹介される。現地調査のうちに撮影した手作りの写真類が提示される。ともかく、筆者たちが培ってきた蘊蓄が随所で傾けられている。だから実際には、たんなる綜説などではない。むしろ、手のこんだ事典のようでもある。第Ⅰ部の総論もそうだが、第Ⅱ部の各論においても、読んで損がないほど十分に読者の知的欲求がくすぐられることは請け合いだ。

瀬戸内寂聴氏によると、本には、おもしろい本、ためになる本、むづかしい本、好きな本などがあるそうだが、さしずめ本書は、ためになる本であり、なおかつ、おもしろい本であるというべきか。犬や猫や馬などの動物好きはもちろん、人類学や歴史学や地域研究などにかかわる人たち、それから、ともかく知識欲が旺盛な人たちにも、おおいに本書を推奨したい。ことに動物愛好家の人たちには、たまらないだろう。猫や犬などの歴史にまつわることを以前にも増して知ることとなり、ますます愛犬や愛猫に向け、いとおしさをつのらせるようになるのではあるまいか。

ごく正直に申して評者は、本書の書評を依頼されて、はじめて手にしたときは、いささ

かなりとも不安を覚えた。どう考えても本書の内容には門外漢にすぎる。執筆者の多くは知らない人たちだ。それにパラパラとめくると、外装などの体裁と目次での洒脱さはともかく、いささか重厚な学術論文集のような内容ではないか。専門外の専門書を読むことほどの難行苦行はない。暗い洞窟のなかを千鳥足状態で歩くようなものだ。そもそも、大学出版会などから刊行される出版物は難物が多いのが相場である。しかも、とても眼には優しいそうにない小さな活字がぎっしりと詰まっているではないか。これは困った、というのが最初の印象であった。

ところが、読み進んでいくうちに、そんな不安が一掃され、ありがたいことに当てが外れた。著者たちが充填する蘊蓄のたまもの、あたかも動物誌のようでもあるから、いささかの動物好きである評者の感性は大いにくすぐられた。身近な家畜（在来家畜）に関する知識の歯ごたえと味わいが、まるでスルメイカを噛みしだくように次第に広がってきた。しかも、ただの動物誌ではない。ネコやウマなどをめぐる人間の歴史や社会の営み、あるいは人間の温かさや我が儘のようなものの絡みあい、まるで博物館で歴史のタペストリーを観るように視覚をとらえるのだ。それらはみな、著者たちの長年のフィールドワークで裏打ちされているのだから、えらい納得できるわけである。

そもそも「在来家畜」とはなにか？あまり聞きなれない概念ではあったが、本書の第Ⅰ部を読み進めていけば、なんのことはない。要するに、いわゆる俗にいう家畜のことなの

である。だが「家畜」では身も蓋もない。ついつい産業家畜を思い浮かべ、愛玩動物を思い描き、野生動物と安易に対比してしまうからだ。そうはさせまい、とする著者たちの意図も本書のテーマなのであろう。

評者のように生かじりの者には、「在来家畜」とはいいて妙、との感が強い。まさに目から鱗である。つまり産業家畜などは家畜化の極、その対極をなす野生動物との間には、さまざまな様相をなす家畜種が存在し、当たり前のお話ではあるが、それぞれの家畜は人間という動物との関係において千差万別である。つまり人間によって生殖をコントロールされる程度が微妙に異なる。どの家畜も実際には、今なお家畜化の途上にあるわけで、そのうえ地域ごとに個性ある個体群を形成している。だから「在来家畜」なのだ。

なぜ家畜が生まれたのか、なぜ家畜は地球上のどこにでもいるのか、どんな歴史を各家畜が歩んできたのか、また、なぜに家畜は多様たりえたのか、十種十色たる存在様式があるのか、などなど、きわめて本質的な問題にアプローチしていくために、「在来家畜」というキーワードは欠かせないのだ、と納得できる。なぜならば、家畜とは「家畜化」された動物のことであり、「家畜化」とは、人間が主体となり、身近に接近する動物を客体とするプロセスのことであるから、家畜は家畜などと十把一絡げにできないわけである。そうした自明の理を理解するに欠かせない概念装置といえよう。

人間が地球上に拡散するとともに、さまざまな家畜が各地に伴われた。また、人間社会

のネットワークのなかで家畜が縦横に運ばれた。だが家畜もさるもの、人間と同様、いく先々の環境条件に堂々と慣れ親しむこととなり、いとも簡単に再野生化したりもする。さらにそれらが、別途、人間に家畜化されてきた仲間や、その周辺の同類種と交渉するわけだから、話がややこしい。評者自身もこれまで、ブタとイノシシに二分し、あれはイノシシだ、いやこれはブタだ、などと、考古学者たちが口角泡とばして議論する場面を目撃しつつ違和感を覚えたりしたものだから、直感的に意を得ることができる。それからネコの章では、副題が「東アジアの feral cats」となっているのであるが、これにも、なるほど、と思わず膝を叩いたような次第である。

本書を編集する在来家畜研究会を主宰し、かつ、本書の肝というべき第Ⅰ部を執筆する野沢謙氏のテーゼによると、家畜とは、その生殖が多かれ少なかれヒトの管理のもとにある動物なのであり、「動物全体を野生動物と家畜とに二分することなど、到底不可能である。家畜化とは1つの過程なのであって、極限まで家畜化された動物から純粋の野生動物まで、連続的なスペクトラムが存在する」ということである。ならば、人間の生業に寄与させるべく手なずけた動物であろうと、人間の気持ちや心を平たくする愛玩動物であろうと、広く家畜と呼ばれる動物はたいがい、実は完璧な家畜ではなく、野生動物と家畜とのはざまの家畜化の過程にある動物、とどのつまり「在来家畜」ということになる。さらには、イノシシや野鶏などの再野生化した動物も少なくなく、話はややこしい。どうやら

まあ、西欧の産業革命の以降に生まれた家畜品種や実験動物をのぞく家畜類はおしなべて、「在来家畜」だと考えたらよいらしい。

なにもかもを乱暴に二分三分したがる類型論（タイポロジー）は、いわば西欧流の合理主義に毒された人間のさがみたいなものである。だから動物についても白か黒、つまり家畜か野生動物のいずれかに分けたがる。ところが実際には、人間からの距離感でいえば、野生動物だってさまざまなのであり、ましてや家畜となると、人間からの管理のされ方により千差万別、つまりグレーゾーンに属する。それが著者たちの思想のようでもある。

本書の基調となるのは、人間を取りまく在来家畜が醸し出す風景の多様性を描き、心地よさ豊かさを伝えることかもしれない。つまり人間史における家畜化のポジティブな側面を強調することでもあろう。現代人の生存を支えている食料や衣料のほとんどは動植物育種の成果なのであり、ぎくしゃくとした現代人の気持ちや心を平たくする効果も計り知れない。この文脈のなか、家畜を茶化するような風潮には、ことに野沢氏の論点は痛烈である。

「比喩としての家畜と家畜化」と題した第I部の最後の章での氏のメッセージには、たいへん強いインパクトを受けた。多くのことを考える契機を得た。古来より、家畜、あるいは家畜化現象のことは、人間のあり方を喩えるメタファーとして、さまざまな言説のなかで多用されてきた。たとえば近年では、ダーウィニズムの側枝たる優生学、さらにその徒花たる悪名高きナチスの人種主義なるものは家畜化理論を粗暴に転用することで生ま

れた。そこまで目くじらをたてることはないが、人類進化の議論のなかで屢々語られる「自己家畜化」理論なるものも、いかにも怪しげであり、その類に連なるのだろう。また最近では、現代の大都市住民の心身に生じる諸々の病的現象、つまりは「文明症候群」あるいは「都市症候群」と呼ばれるような現象に対して、これまた「自己家畜化」理論で片づけようとする潮流があるのだそうだ。

これらを俎上にのせる野沢氏の切り口は痛快である。学問的営為における同氏の真摯さがにじみ出ているようであり、思わず喝采してしまう。いわく、「人類の進化という複雑にして多相的な現象を矮小化するに役立つだけではないか…比喩によって物ごとが理解できたと考えるのは錯覚であろう」（p. 100）、「自己家畜化は家畜概念の誤用といわざるを得ない」（p. 101）、「自己家畜化などの造語が家畜化本来の目的や成果に対してではなく、その副作用とでも言うべきネガティブな現象の比喩として用いられている点に問題がある」（p. 103）などの歯に衣着せぬ論評には、ことごとく吾が意をえたり。

ともかく新たな知識を与えられるだけでなく、多くのことを考える契機を授けられた。ながらく南太平洋の島々で人類学の研究を続けてきた評者だが、そこでは、いくつかの奇妙な動物の光景を目撃してきた。たとえばマーケサス諸島やモオレア島では、海拔千メートル以上の峨々たる山頂付近で、けばけばしい色の雄鶏たちが猛烈な奇声を発しながら闊歩している。同じくマーケサス諸島やイースター島では山間をぬい悍馬が群れてい

る。トンガの島々ではブタの群れが浜の浅瀬をうろついている。さらに多くの島では、そこらじゅう、おびたしい数のイヌが徘徊する。ハワイのモロカイの島影（俗にクジラ牧場と呼ばれる）では年がら年中、クジラが潮吹きに余念がない。イヌとブタだけは、かろうじて家畜めいているが、それでも人間が深く関与しているようには思えない。野鶏にいたっては、まるで野生動物そのものであり、人間の「に」の字も感じられない。

これらについては、本書を読めば、たちどころに謎が解ける。まさに再野生化動物のしたたかさなのであり、地球上のどこにでも各種の家畜が再野生化しているようだ。かつてヨーロッパ人の船乗りたちが生体で運び、緊急用の非常食として中継地での補給のために解き放した動物に多くは由来するらしい。そんなことを確認できた。なるほど家畜化は可逆的過程なのだ。

さらに評者の個人ごとで恐縮であるが、生来のネコ好きで、ウマ好きでハムスター好きの評者には、ことにネコとウマのことにに関して、大変多くのことを学ばせていただいた。たとえば、ネコの毛色の神秘。さらに尾曲がりネコのこと。昔、大学に入るために京都に來た評者は京ネコに違和感をおぼえたものである。ネコには出会うが、よく見慣れていた短尾（尾曲がり）ネコが異様に少ない。どれも長い素直な尻尾を振りまわしている。その記憶がよみがえるとともに、実際に「京には尾の長い唐猫」という言い伝えがあることを知らされて、とても感激した次第である。ともかく、ネコ愛好家にはたまらない章では

あろう。ウマの章では、筆者たちの研究によってようやく、日本在来馬の起源が解明されつつあることを教えられた。考古学方面の関係者にも是非とも一読ねがいたいものだ。ただひとつ本書に、ハムスターの章がないのは残念だった。

ともかく本書により家畜に関する多くのことを教えられた。とてもためになる気がする本であった。だから絶妙な読後感にひたることができた。読書そのものを愉しみ、主人公たる在来家畜たちに癒され、著者たちが研究活動の根本におくフィールドワークの楽しみをヴァーチャルに追いかけ、同時に人間の歴史の営みについても目新しい側面のあることを教えられたように思う。

籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワークー長期の19世紀』世界思想社、2009年、358 p.

島田竜登*

近ごろ稀にみる優れた論集である。本書は、19世紀のアジア経済史をテーマとする論文集であるが、ヨーロッパさらには世界全体を視野に入れ、新たな世界史像を模索しようとする試みである。京都大学人文科学研究所における共同研究の成果の一部で、理論的大胆さと綿密な実証が見事に絡み合っており、硬質の良書となっている。

まずは、各章ごとにその内容を紹介・検討

* 西南学院大学経済学部